

スウィート・ビターに 祝福を！

黒兎玖乃



一、ノット・スウィート

「――それでは、新郎新婦の入場です！」

司会者の言葉をきっかけに、会場からは溢れんばかりの拍手が惜しみなく送られる。その対象はもちろん、バージン・ロードをゆっくりと進んで行く新たな夫婦。

喜びのあまりに、涙を流して喜んでいる女性の両親。少し照れくさそうな顔をしながら、少しずつ新しい人生への道のりを歩む二人。止むことのない拍手。天にも昇る気持ち。感激、至福の一時。

新郎新婦が席につくと、次は媒酌人のスピーチが始まった。分からない人にはあまり分からない二人の馴れ初めを、時折手元の紙に目をやりながら言い連ねていく。

来賓祝辞、乾杯と、式はどんどん進んで行き、そして――

「続きましては、ウェディングケーキの――」

そこまで聞いて、俺は喜びの止まない会場を後にした。

「……いっつも思うが、つまんねえな」

結婚式場の外扉に背中を預け、俺――小泉竜馬は、タバコに火をつける。

空模様は微妙で、ぽつぽつと小雨が落ちているのが肉眼で確認できた。それ故に、人通りは少ない。普段は人前でタバコは吸わない主義の俺にとっては、むしろ都合がいい。人込みが好き、というわけでもないしな。人と関わるのは、ちょっと苦手だ。

鼻腔にためた煙を、口からふうーっと吐き出す。雨混じりの空気の中に煙は溶けていって、やがてはそのまま空に昇って行った。タバコを持った右手を、だらん、と下げる。

扉にタバコをぐりぐりと押し付ける。これは式のたびにやる皮肉を込めた慣習だ。

見渡した範囲にあったくずかごに吸殻を放り投げて、小雨の中をつかつかと歩き出す。

真っ白な空は、少しの影しか落とさない。

「さて」俺は無造作の髪をぽりぽりと搔いて、いつもの道を歩き出す。

そう、これでいい。これでいいんだ。

俺はただ、自分の仕事をきちんとこなせていけばいい。

二時間かそこら町をうろついて、俺は仕事場に戻った。

「お。リューマ君、おかえり」

「……どうも」

店の裏口から中に入ると、あっという間に甘酸っぱい柑橘類のような香りが嗅覚を刺激した。普段あまり感じない香りだ。このレモンフレーバーは……………ビターレモン？

「店長。何か新作でも作ってるんですか？」

「ん、よくわかったね、さすがリューマ君。……そうだ、リューマ君にも味見してもらおうかな」

そうやって店長が差し出したのは、所々欠けている――恐らく何人かに味見してもらったんだろう――ほのかなレモン色のゼリーを乗せた、レアチーズケーキのようだった。チーズケーキと

いえばマーマレードが主流だけど、レモンを、しかもゼリーを乗せるとは、さすが店長考え方が違う。

俺はそこらにあったお客様用の透明なスプーンを取って、一口運ぶ。咀嚼する。……ふうむ。

「どうかな？」

どこか試すような笑顔で、店長が訊ねる。

「確かに組み合わせの斬新さがありますけど、味においては『新作！』と言って出すほどの真新しさはありませんね。うまくは言えませんが、見た目には反してほのかに口で解けるような甘さがあればいけると思います」

「毎度毎度辛口だねこりゃ」

店長がぴしゃりと自分の額を叩く。そこまで批判したつもりはないんだけどな。あくまで自分の率直な意見を述べただけで、辛口だとは微塵にも思っていない。口が悪いのは昔からだけど。

「それじゃ、辛口コメントに似合うだけの新作をリューマ君にも作ってもらおうかな」

今度は意地の悪そうな笑顔に切り替えて、店長が言う。

ああ、またか。

「よっ、この天才パティシエ」

……そら来た。

「勘弁してください……」

「何を言うかね！ あの、かつて日本一とも言われた天才一流パティシエ小泉正一の息子であるリューマ君なら、こんなことはお茶の子さいさいだろう！」

「そういう固定観念を持たれても困ります」

「釣れないねー」

ケタケタケタ、と店長は笑う。そしてその手でチーズケーキを載せてある皿を持つと、調理場のほうへと戻っていった。俺は休憩室のソファにどかりと座って、いつもよりも重いため息を吐く。

店長———藤堂由香里さんは言わずもがな、ここ「菓子屋グラッチェ」の店長だ。

そして、俺はグラッチェの一従業員の小泉竜馬。趣味は確かにお菓子作りだけでも、実際お菓子はそこまで好きじゃない。

それじゃあなぜ、俺がここに勤めているか。理由は簡単だった。

無職になったときに、気まぐれでやって来たお菓子屋に名乗ったら、スカウトされた。それだけ。元々は、地元にいる母親の誕生日にケーキでも贈ろうと思って、グラッチェへと向かったはずだった。

ところがどっこい、配送の準備までしてくれる心優しいグラッチェがあったばかりに、俺は親の名前を知られて、同時に親が天才的なパティシエであることも従業員にバレて———今に至る。

スカウトと言っても、さすがにお菓子を作れるかどうかだけはテストされた。

その時はお菓子なんか作るのは初めてだったんだけど、料理なら手馴れていたからお菓子の本を見ながら「それ通り」に作っていったら、「これはすごい」「本当にお菓子を作ったことがないのか？」などと言われた。本の順序どおりに作ったから、美味しくなるのは当たり前だと思ったんだけど。

そんな理屈はこの従業員には伝わらなかった。

「今日から君も、『菓子屋グラッチェ』の一員だ！」

結論から言えば、最初から入れる気満々だったんだと思う。もし下手糞であっても、「君にはあのパティシエの血が流れているから大丈夫だ」とか言うつもりだったんだろう。なら、そっちのほうが良かったかもしれない。

しかし俺は、うまいことお菓子を作ってしまった。それがいけなかった。

結果、俺はこうして店に来るたびに新作はないかと詰問のごとく訊ねられるようになり、そのたびに日夜アイデアを捻り出すことに思索を回さなければならなかった。無職だから良かったものの、これがもし彼女持ちだったなら――

「……………くそ、」数十分前の映像が再生されそうになって、俺はぶんぶん頭を横に振った。脳内に刻み込まれたビデオテープを、くしゃくしゃに丸めて隅っこに捨てる。

忘れよう。そう思ったはずだ。

こうしてはいられない。不本意だけれども、新たなケーキを考えなければいけない。そうでもしなければお菓子を作る以外に何も取り柄のない俺なんかすぐに産業廃棄物と化してしまう。

俺はロッカーの中から作業着（いまだに名前覚えてない）を取り出して、更衣室の扉を開ける。

「よう、リューマ。久しぶりだな」

入った途端、計ったかのように話しかけてきたのは、先輩である神谷英二さんだった。

「……どうもです」

「なんだなんだ、暗いぞお前！ もうちょっと元気出せよ！」

「すみません、元々こんな感じで」

先輩に背中をバンバンと叩かれる。学生時代野球部だったとか何とかで、神谷さんは力が強い。だからこうして背中を叩かれるだけでも息が止まりそうなくらい苦しかった。

「あ、そうだ。俺もちょっと新しいの作ってみたから、後で試食頼むぜー」

「はい、分かりました」

そう応対すると、終始あっけらかんとした笑顔を浮かべたまま、先輩は更衣室から出て行った。

これが、菓子屋グラッチェの日常だ。店に来るたびに人のよい先輩に絡まれて、そしてそのたびに新作新作と聞き慣れた言葉が鼓膜に刺さる。確かに菓子屋にとっては新作を絶えず考えることは必須なのかもしれないけど、ここまで圧をかけて言われると息苦しくなる。背中痛みとは別の息苦しさ。

手早く作業着に着替えると、たまたまあった全身鏡で自分の作業着姿を凝視する。つんつんとした黒髪に、三白眼。自分で見ていて怖くなるくらいに愛想のない顔だ。笑顔なんて浮かべた日には、世界に終わりが訪れそうな気がする。

だから俺は滅多に笑うことなんてないし、そもそも笑おうとも思わない。今の俺に、笑うだけの余裕はない。

鏡から目を離して、更衣室を出る。それと同時に、休憩室においてある電話のベルが鳴った。俺以外には誰もいないから、とりあえず受話器を取る。後で、店長に内容を話しておけば、いいか。

「はい、こちら菓子屋グラッチェです」

『あ、どうも。お世話になりました成宮です！』

胸の奥に、何かの破片が突き刺さる。

「……ああ、はい、どうも」

『つい先ほど、式を終えました。あんなに素晴らしいウェディングケーキをありがとうございました』

「はい、ありがとうございます」

『よろしければ……作ったご本人とお会いできませんか？ 直接会って、お礼が』

「申し訳ございませんが、それは本人のプライバシーもあるかと思いますので、遠慮させていただきます」

『あ、そうですか……。分かりました。ともかく、どうもありがとうございました！』

「はい、では」

俺は返事を待たずに受話器を置いた。ふと、右に見えた窓の外を眺める。雨は段々本降りになってきていて、人の姿はほとんど見当たらなかった。

受話器の隣に置いてある、ケーキの予約帳をめくる。その何ヶ月か前の、予約。

「成宮様 ウェディングケーキ」

成宮。———成宮、加奈子。

俺は間違いなく見覚えのあるその名前を、しばらく見つめた。

「リューマ君？ どうしたんだーい？」

「……はい、すぐ行きます」

俺は予約帳を閉じて、ついでに気合入れに両頬をぱちんと叩いて、調理場へ向かった。